

「平和の塔」内部公開

平和の塔は、「日本書紀」に記される神武天皇の即位から2,600年に当たる昭和15年に「紀元2,600年記念事業」の一つとして建設されました。当時の戦争に向かう時代背景の中で建設された施設ですが、現在は公園として広く県民に親しまれている貴重な歴史遺産です。

塔の高さは36.4mで、塔の四隅には、荒御魂（あらみたま）像と呼ばれる武人像、和御魂（にぎみたま）像と呼ばれる工人像、幸御魂（さちみたま）像と呼ばれる農人像、奇御魂（くしみたま）像と呼ばれる漁人像が配置されており、これらの像は高さ4.5mの信楽焼で造られています。

塔入口の青銅扉には、神武天皇が美々津港からお船出した模様が描かれており、それを囲む62の模様は、古事記、日本書紀に記された諸物が描かれています。

【塔入口の青銅扉】



【正面左手前方】

荒御魂像
(あらみたま・武人)



【正面左手後方】

奇御魂像
(くしみたま・漁人)



【正面右手前方】

和御魂像
(にぎみたま・工人)



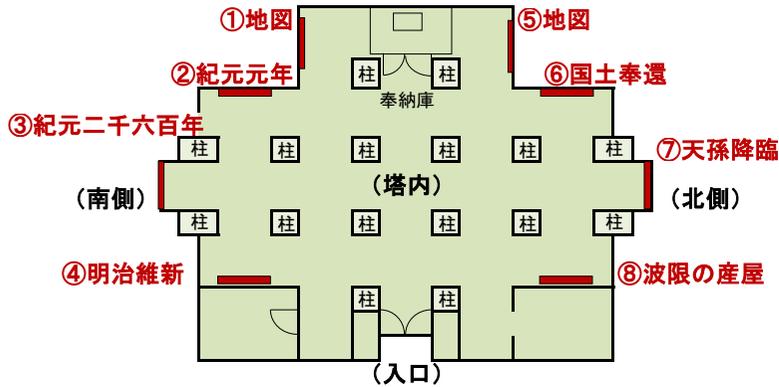
【正面右手後方】

幸御魂像
(さちみたま・農人)



「平和の塔」 塔内の案内

塔内部の石こうレリーフ配置



塔の内部には、彫刻家日名子実三氏が制作した石膏レリーフ(浮き彫り彫刻)8点が壁面に飾られています。それらの作品は、日本神話にでてくる天孫降臨などを表現したものや、当時の時代背景を物語るものです。

【日名子実三 = 彫刻家(明治26(1893)年～昭和20年(1945)年)大分県出身】

サッカーのワールドカップやJリーグで知られるようになった日本サッカー協会のマークである三本足の鳥(八咫鳥: やたがらす)がサッカーボールを足で押さえている図案の制作者として知られています。(八咫鳥は、神武東征の折、吉野の山中で天の神が道案内としてつかわしたとされる神話上の鳥。)

日名子は人体像を中心とした彫刻のほか、各種メダルや大型の記念碑など従来の彫刻の範疇を超えた多岐にわたる活動で、彫刻芸術の普及に貢献しました。

石こうレリーフ

塔正面扉の奥にある部屋には、石こう製の8枚のレリーフが四周の壁にめぐらされています。右側の3枚は、「国土奉還」、「天孫降臨」、「波限の産屋」(なぎさのうぶや)という紀元前の神話の世界、そして左側の3枚は、「紀元元年」、「明治維新」、「紀元二千六百年」という神武天皇に始まる当時の歴史観が表現されているものと思われます。また、正面奥の両側には、地球の西半球と東半球の地図が描かれています。

①地図 (西半球の図)



②紀元元年



(神武天皇の即位)

④明治維新



(明治天皇の東京遷都)

③紀元二千六百年



⑦天孫降臨



⑤地図 (東半球の図)



⑥国土奉還



(オオクニヌシミコトの国譲り)

⑧波限の産屋



(ウガヤフキアエズミコトの誕生)